慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トッテの世界 : 幼児絵本の翻訳をめぐる比較教育学的検討
Sub Title	Totte ska vara Totte aven i Japan.
Author	石崎, 秀和(Ishizaki, Hidekazu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1979
Jtitle	哲學 No.69 (1979. 3) ,p.91- 129
JaLC DOI	
Abstract	It is well known fact that the translation of books entails some adaptation of the originals. To what degree we should permit this inevitable change must be judged from many different aspects. Cultural, social, historical and even geographical differences between "exporting" countries and "importing" countries of the books might be taken into account, needless to say about linguistic questions per se. Further in the field of children's books, we see a quite exceptional condition will decide much of the direction the adaptation is to steer in. This condition is attributed to the attitude of the translator who inclines to accmodate his version to the parents' wish that their children should be provided only with "good" books. It may then be reasonable to expect that the translation or the adaptation of children's books mirrors out some standard of goodness which prevails in the importing country in question so long as child upbringing is concerned. In this respect the Japanese version of "Totte series" is closely examined here, in comparison both with the originals in Swedish and their English version as one of the most extreme translations seemingly. The reason I choose these books, originally written by Gunilla Wolde, for this purpose is not only because they have gained world wide success, but rather because these original books contain plenty of vivid educational stimuli which should have given some significant impact upon all the younger children in the world in spite of national borders.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000069-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「トッテの世界」

—幼児絵本の翻訳をめぐる比較教育学的検討—

石　崎　秀　和*

Totte ska vara Totte även i Japan.

Hidekazu Ishizaki

It is well known fact that the translation of books entails some adaptation of the originals. To what degree we should permit this inevitable change must be judged from many different aspects. Cultural, social, historical and even geographical differences between „exporting" countries and „importing" countries of the books might be taken into account, needless to say about linguistic questions per se.

Further in the field of children's books, we see a quite exceptional condition will decide much of the direction the adaptation is to steer in. This condition is attributed to the attitude of the translator who inclines to accmodate his version to the parents' wish that their children should be provided only with „good" books.

It may then be reasonable to expect that the translation or the adaptation of children's books mirrors out some standard of goodness which prevails in the importing country in question, so long as child upbringing is concerned.

In this respect the Japanese version of „Totte series" is closely examined here, in comparison both with the originals in Swedish and their English version as one of the most extreme translations seemingly. The reason I choose these books, originally written by Gunilla Wolde, for this purpose is not only because they have gained world wide success, but rather because these original books contain plenty of vivid educational stimuli which should have given some significant impact upon all the younger children in the world in spite of national borders.

* 慶應義塾大学文学部助手（教育学）

Jag vill till Gnilla Wolde framföra mitt varma tack för alla givande diskussioner i brev form. Jag önskar tacka Mary Ørvig, Lena Törnqvist och Peter Wolde för värdefulla stöd och goda informationer.
又，こういう形で，翻訳の検討をすることを，寛大にも，気持良く受容れて下さった．偕成社の編集部の方々に感謝致します．

二つの教育大国

北ヨーロッパの小さな王国スウェーデンを，最も適切な形で説明するとしたら，一体どんな表現がふさわしいのであろうか．「ケインズ以前にケインズ理論を実践した，資本主義体制下の社会主義国」であろうか．それとも「高福祉社会を逸早く達成し，高年令化，高アル中化途上にある，先進工業国」だろうか．あるいはまた，「女性の社会進出が目覚ましいフリーセックスの国」であろうか．恐らく，こうした表現は皆，現代スウェーデン社会の一面を，それぞれ正しく映していると思う[(1)]．しかし私の様に，社会の有様をできるだけ教育学の覗きめがねで見つめようとしている者にとっては，何と言っても，「スウェーデンは世界有数の教育大国である」という表現が，一番シックリ来るように思う．

教育大国と言えば，一方の雄として，わが日本国を名指しにしないのは不当であると，思われるかもしれない．確かに日本は，ある意味において世界にも例を見ないほどの教育大国である．しかしその場合に，わざわざある意味においてと断るのは，ちょうど私がスウェーデンを教育大国と呼ぶ際に用いている基準とは，正反対か，あるいは少くとも全く違った種類の基準が，日本に対してあてがわれているからなのである．

現代教育学の言い方に沿えば，すべての教育的いとなみは，およそ次の二つのモメントに，理論上，分解することができる．一方は，「暫定的にもせよ，比較的明確に規定された教育目標に向って，人間を着実に訓練する」というあり方で，他方は，「人間の本来的な可能性が，個人の内部から自然に芽生え伸びていく過程を重視しよう」とするあり方である．前者を，少々強引な手段に訴える素地のある，攻勢的働きかけと見て，「鍛えあげのモメント」後者を人間タネに対する手厚い水やり肥しやりの仕事と見て，「野菜育てのモメント」と言うこともできよう[(2)]．

さて，この二つのモメントを使って両国の違いを描くとすれば，日本は

明らかに，「鍛えあげのモメント」を社会の隅々に到るまで，見事に発達させた教育大国であり，スウェーデンの方は，この三十年来，専ら「野菜育てのモメント」を挙国一致で試行錯誤してきた「教育農業大国」であると言えよう．なぜ，そういうことになるのか承服できない，という方には，ビヤネール多美子氏の手になる，スウェーデンの教育レポート[3]を一読するよう，御薦めしたい．その理由は，いわゆる日本の学校のイメージを念頭に置いて，彼女のレポートを読むならば，そこに報告されている，スウーデンの学校教育活動のあり方が，全く異質なもの，あるいは，日本的な意味で現実離れのしたものとして映るであろうことが確実だからである．

私としては，自分自身の目で現実の違いを見つめるか，あるいは，上述したレポートのように信頼の置ける具体的資料を通して，両国の行き方の違いを直観的につかむやり方が，今の場合，最もふさわしいように思う．しかしだからと言って，私の議論を裏づける手段が外にないわけではない．

教育を構成する二つのモメントの内，どちらか一方が他方を完全に排除してしまうということは，理論上は起りえない．例えば，いかに「鍛えあげのモメント」が一つの教育現実の中で，色濃く押し出されようと，「野菜そだてのモメント」が完全になくなってしまうことは考えられないのである．なぜならば，「鍛えあげのモメント」が仕事をする為には，どうしても鍛えあげに答えて，あるいは反発して頭をもたげてくる「芽」の存在が必要だし，逆に「野菜育てのモメント」が形を成す為には，伸びて行く方向がきまるように支柱にしばりつけたり，育つ力にきっかけを与えたいが由に，ふみつけにすることさえ必要になってくるからである．

しかし，この二つのモメントは相補的であるというよりは，対立的，相互矛盾的に共存しながら，教育現実を規定しあっているから，一方のモメントが，自分の持ち味を発揮したいがために，他方のモメントをどんどん圧迫するということが，実際には大いにありうる．しかし，もし片方のモ

メントが，他方のモメントを，ある一線を越える所まで押し込んで，相手の活動力を奪ってしまえば，これはもう，教育とは呼び得ない事態なのである．従って，もしこうした状態に少しでも近ずいたなら，私達は大いに警戒しなければならないということになる．

さてそれでは，「鍛えあげのモメント」が学校教育の中で主勢力を獲得した場合を考えてみよう．なにしろ教育目標や教育内容が明確に決っている上に，手段の方は効率一辺倒に選ぶことができる．当然，学校は質量共に一定の水準以上の卒業生を，きちんきちんと定期的に送り出すことが可能だし，社会にとって更につごうの良いことには，学校教育の経費をぎりぎりまで切りつめられることである．しかしただ一つ困ったことがある．それは，こういう教育の行き方だと，自己批判の基準が，あくまでも目標への達成度に則した形以外に，求められないということである．つまり，目標に行き着く迄の教育行程でどんなに妙な事が起っていようと，「鍛えあげのモメント」自体からは，本格的な批判の根拠が，論理的に言って何一つ引き出し得ないのである．経済界や産業界などの，いわば教育の外側の世界から，こうした教育の行き方に対して牽勢のかかる可能性があれば問題はないのだが，これが実は難しい．即ち，教育の目標を具体的に何にするか，という段階では議論に加わってきても，「鍛えあげのモメント」そのものの問題性を追究する必然性が，そうした世界には見当らないからである．むしろ学校が，「鍛えあげのモメント」に徹して，いわゆる学力がレヴェル以上の人材を，一定量送り出してくれれば，社会全体の経済発展や技術革新を推し進める上で，誠に好つごうなのである．こうして，学校と社会の生産的部門がガッチリ手を組んだ全体志向型の教育大国ができ上るのである．こうした教育のただ中にあって，問題を一身に引き受けている子どものことさえ無視すれば，実に非の打ち所のない教育のあり方だと言える．これが私達の教育大国日本の姿でないとは，一体誰が言えようか．

一方，「野菜育てのモメント」に重点を置く行き方のメリットは何であろうか．これはもう，実利的には何も得るところがない，と言って良い．いわば，生徒一人一人に対して，あらゆる教育的機会を利用して最善の教育効果をもたらそう，というのだから大変である．このモメントの要請をいくらかでも現実化しようとすれば，およそ過大な負担を引受けざるを得なくなる．1940年代から本格化して，終ることなく続くスウェーデンの教育改革が，一貫して，このモメントによって突き動かされてきたという事実は，この教育改革の歴史を知る人にとっては，余りにも明白である[(4)]．しかし，あらゆる生徒に対して，最善の教育的かかわりを意図するとは言っても，現実には今の所，不可能に近い．つまり実際に，どうしてもある種の妥協を余儀なくされる．例えば今，能力の高い子と，能力の低い子のどちらか一方に対してしか，教育的にかかわってやれないとしたら，どちらの子どもを選べば良いのだろうか．社会全般の利益を考えれば，文句なく能力の高い子を選ぶべきである．つまり能力の高い子どもならば，教育的努力に充分引合うだけの成果を示してくれるだろうし，社会の発展に対して，いずれ積極的に貢献してくれるだろうからである．だが「野菜育てのモメント」からは，あくまでも，二人の子どもを分けへだてする根拠が引き出せない．どちらの子どもに対しても，それぞれの自己実現に対して手を貸さないわけにはいかないのである．それでもどうしても選ばなければならない，ということになれば，今まで，あるいはこれから先も，教育の外側から来る要請のおかげで，常に損な立場に置かれやすい能力の低い子どもの方へ，目が行くことだろう．スウェーデンの初等教育段階での改革は，すべて，こうしたタイプの選択を伴ってきたように思う．従ってその結果，新しい困難な問題を，学校が敢えて社会に投げかける，というような事態も生じて来ているのである[(5)]．

注

（1） 現代スウェーデン社会についての一般的イメージを得る為の良書としては，次のものがあげられる．

スウェーデン社会研究所編「スウェーデン」芸林書房　1971.

同研究所編「福祉とは何をすることか」至誠堂　1974.

（2） およそ「教育とは何か」「教育は如何にあるべきか」を論じた教育思想には，この二つのモメントが同時に含まれ，関心を払われている，という意味．また特定の教育思想をとり上げて，その教育学史上の意味から「刻印モデル」「農耕モデル」等と呼ぶことも可能であるが，その場合は，その思想の性格上，片方のモメントが強調されているだけで，決して他方のモメントが見落されているとは考えられない．

この問題に関して，私が特に影響を受けたのは，Peters, R, S: "Education as Initiation" in "Authority, Responsibility and Education", George Allen & Unwin Ltd, 1973 (3rd edition)

村井実「教育学入門(下)」講談社　1976

（3） ビヤネール多美子「性教育と授業革命」昌平社　1976

（4） スウェーデンの学校改革の歴史を概観する為の良書．

Dahllöf, Urban: "Svensk Utbildningsplanering under 25 år", Lund 1971

Marklund, Sixten: "Vår Skola", Stockholm 1974

（5） 最も特徴的な動向として，最近の SIA 教育改革計画があげられる．これは，従来の学校のワクを広げて，いわば地域住民参加の下で，学校の建物の中では解決のつかない難問を解こうとする試みである．

"Skolans arbetsmiljö", SOU 1974 : 53

またスウェーデンの教育改革の特徴をつかむ為には，

中嶋博「スウェーデンの生涯教育」スウェーデン社会研究所　1970

石崎秀和「教育問題についての所見」スウェーデン社会研究所月報　1978年　vol. 10 No. 7

家庭教育と絵本

所で，教育は決して，小学校入学と共に始まるわけではない．むしろ家庭に於る幼児のしつけの中に，その社会の教育全般に対する基本的姿勢が

最も如実に表わされているものである．では現代のスウェーデンでは，どんな形のしつけが一般的なのだろうか．

若いスウェーデン人達が子どもを育てる様子を見ていると，明らかに一つの共通性が発見できる．それは要するに，子どもを一個の人格として尊重しよう，と努力している態度である．なぜそうした態度が，若い人々の間で，これほど一般的になったのだろうか．勿論，社会の様々な要因が関連していることは事実だが，それにしても，最近の学校教育のあり方が，一枚，大きくかんでいることは間違いない．

更にハッキリ言えることは，現代のスウェーデン社会が，親のそうした養育態度を支持するような各種条件を，現実的に保証しているということである．つまり，子どもを強制したり，だましたりするのでなくて，かと言って，ほったらかしたり，あまやかしたりもせずに，いわば同等な人間の交わりの中で養育しようとすれば，ともかく親の負担は，大変大きなものになる．当然，子どもとの実質接触時間は長くなるし，子どもの立場や状況を思いやる為に，まず親の側に，ゆとりのある態度が不可欠になる．もしも収入や生活に不安があったり，労働条件が厳しすぎて，両親がたえず疲労困憊の状態であれば，とても，子どもにまともにかかわっていられるわけがない．また，「遊び場」や「環境」に関する余分な心配や負担を，専ら親が一人で背負わなければならないような社会であれば，とても喜んで，子どもの相手などする気にはなれないであろう．この点スウェーデンは，既にかなり満足すべき社会状況にあると言える．

従って，家族生活を支援するような，物理的，社会的条件の整備ということが，養育態度を上述したような意味で人間的なものにする為に，思いの外，重要な働きをしていると見て良いであろう．更に言うならば，スウェーデンに例を見るような社会福祉の推進が，親子の交わりを，現代的制約の中でより人間的なものにする為に，不可欠な要件なのかもしれないのである．

さて最近では，家庭における養育のあり方を決定する要因として，いわゆる「自然環境」や「社会的条件」を考えるだけでは不充分になってきている．というのは，始めから子どもに対する直接的働きかけを狙った，色々な社会教育的活動や試みが一般的になってきたからである．例えば，テレビやラジオの教育番組や子ども向け番組を通して，マスコミが行う働きかけがある．また最新のマス・メディアほどの派出さはないものの，着実で深い教育的効果を持つ，児童向け出版物の影響が見のがせないのである．

二十世紀に入ってからのスウェーデンは，児童向け図書の輸出国としても，世界に名だたる地位を占めている[(1)]．特に最近では，各種の社会問題や倫理的テーマを，子ども達自身に考えさせようとする傾向の図書が数多く出版され，国際的に高い評価を得ているのである．更に注目すべきことはこの10年位の間で，ごく幼い子どもの為に書かれた「絵本」の中に，今問題にしている新しい形の養育態度を，真正面から打出す，勝れた作品が現れて来たことである．しかもそうした絵本が，いわゆる娯楽物に対抗して，多数の読者を，スウェーデンの内外に集めていることも，疑いようのない事実なのである．

この場合に重要なのは，スウェーデンのような社会では，そうした絵本が単に子どもへの働きかけに終るのでなくて，若い父親や母親に対しても，新しい形の養育態度を確認させる拠り所として，意味を持ってくることである．なぜならば，テレビやラジオと違って絵本の場合は，まだ字の読めない子どもの為に，親が一緒になって読んでやるというかかわりが必要になる．そしてもし親がゆとりある態度で，このかかわりに臨めば，当然，絵本の内容を自分に引きつけて検討しないわけには行かなくなるからである．

こういうわけで，今やスウェーデンでは，幼児向け絵本が，家庭に於る養育，しつけという領分で，一つの重要な役割を果すようになったと言え

る．従って，一つの研究方法として，逆にその絵本の世界に，スウェーデン社会に一般的な養育態度の現れを探ることは，あながち無理な試みとは言えないと思う．それどころか，対象になる絵本の選び方さえ適切ならばそこから，かなりシャープな情報を引き出すことも不可能ではないかもしれないのである．

所で私は，スウェーデンの教育事情を論ずるに当って，まず学校教育の文脈から始めた．そして，その際，日本の現状を対比させるということを心がけた．今，話が論理の流れとして，家庭におけるしつけ，養育の問題に移った以上，やはりここでも，日本社会の現状というものを反映させて考えたい．しかし，テレビの放送量がのべにして，スウェーデンの6倍以上もあり，また日本独特の幼児向け月刊雑誌なども含めて，おびただしい書籍出版量を誇る私達の日本で，幼児向け絵本の果す役割を，スウェーデン並に見積ることは無謀であろう．

更に絵本の専門家でもない私が，今の日本を代表するような幼児向け絵本を選ぶということは，全く不可能に近いのである．何しろ日本では，幼児向け絵本だけでも，翻訳物を含めて，大変な数が出版されている[(2)]のである．その上，家庭教育に於る絵本の生かされ方が，日本とスウェーデンでは明らかに異ることが予想されるだけに[(3)]，日本の家庭に於るしつけを考える材料として，日本人の原作になる絵本を用いることは，この際避けたいのである．

所が幸いなことに，若いスウェーデン人達の養育態度を最も良く表現した資料として，私が俎上に乗せようとしていた一連の絵本が，日本でも，最近翻訳されたのである．原作を初めて読んだ時の興奮を期待しながら翻訳に目を通したところ，そこで私が得た印象は，実に複雑なものであった．つまり翻訳としては大変出来の良い作品であるにもかかわらず，私が一番気にかけている「養育の基本姿勢」，「子ども観」といったものが，奇妙に原作とは異っていたのである．そこで私は，少々大胆とは思うが，原

作の絵本に翻訳を付き合わせて訳文の問題点を意地悪く詮索し，そこに両国の養育態度の違いを，片方のスウェーデンについては直接的に，他方の日本については，いわば投影法的に，これから描き出してみたいと思うのである．

注

（1） この事実に関する統計的報告は，次の論文に詳しくなされている．
Furuland, Lars: "Sweden and the International Children's Book Market: History and Present Situation" in "Children's Books in Translation" ed. by Göte Klinberg, Mary Ørvig and Stuart Amor, Almqvist & Wiksell, Uppsala 1978 pp. 60-76.

（2） この1年間に日本で出版された絵本は，実に600余点に達する．（1978年12月4日付読売新聞，婦人とくらし欄より）

（3） 幼児向絵本は，本来，大人が子どもの為に読んでやるものである。つまり，子どもがかなり字を読めるようになっても，絵と本の内容に没頭できるように，親（大人）が読んでやることが望ましいのである。この点，日本では，かなり早くから，子どもが一人で，絵本を読まされるようになる．確かに「平仮名」という「文字」を学ぶ訓練にはなるかもしれないが，この時期にふさわしい「言葉」の教育が，このやり方で可能だとは思わない．また，日本の絵本には，こういう観点から，必要以上に文章が幼児化されたり，簡略化されたりしたものも見かけられる．この問題は，別の機会に論じたい．

トッテの世界

現在スウェーデンに住んでいる12才位から下の年令の子どもで，『トッテ』[1]のことを全く知らない者は，恐らく稀であろう．勿論そうした年令の子どもを持つ親にとっても，事情は同じである．

さて，この「トッテ」というのは，実は現代スウェーデンを代表する児童絵本作家グニラ・ヴルデ[2]のデヴュー作に登場する3才位の「ぼうや」の名前なのである．1969年に第一作が書かれてから，1973年の最終作が出るまでに，全部で10巻が刊行されており，これが全体として，「トッテ・シ

リーズ」を形づくっているのである．

作者のグニラ・ヴルデは，このシリーズを書き出す以前から，既にさし絵画家，新聞の諷刺画家として知られていたものの，本格的な絵本の製作に取りかかるのは，これが初めてであった[3]．この仕事を始めた理由として，ヴルデ自身があげているのは，当時のスウェーデンには，赤ちゃん向けの「字のない絵本」や「これなあに？」の類と，児童向けの，いわゆる童話は豊富にあったにもかかわらず，その中間に位置すべき作品に見るべきものがなかった，ということである．つまり3～6才位の幼児達が，自分の生活を確認して楽しむことのできるような絵本が，身近になかったということが，ヴルデにきっかけを与えたのである．自分自身が当時，幼児をかかえた母親であったヴルデは，その不自由さを痛感し，それならば自分の手で，という風に思い立った，と述べている．従って，既に二人の子どもを一応手の離せる所まで育て上げ，少し落ちつきを持って三人目の子どもの世話にとりかかった，スウェーデンの若い母親の目が，シリーズの全作品を強く貫いている，と言って良いであろう．

スウェーデン児童図書研究所の所長であると同時に，この領域の研究者として，国際的権威の一人である Mary Ørvig[4] は，その著書 "Children's books in Sweeden 1945～1970" の中で，ヴルデのことを，60年代に登場した，最も注目すべき絵本作家として紹介している．しかも，この本が出た段階では，ヴルデの作品はわずかに2，3作しか発表されていなかったわけであるから，如何にヴルデの作品が独創的であったかが，判ろうと言うものである．ちなみに，この時の紹介文には，「子どもの全く平凡な生活を描いていながら，そこに逞しい生命力を感じさせる….」と記されている．

ヴルデの作品は当然ながら，現在では，サンドベリィ夫妻[5]の作品などと並んで，スウェーデンの幼稚園，保育園に於る最も重要な絵本に数えられているが，こうした保育関係者とのインタヴューの中で，ヴルデ自身は，

「幼児に対して，出来るだけ良い本を与えたかった．つまり子どもを楽しませると同時に，育てるような本が，私のねらいであった．」と語っているのである．

ここで確認しておかなければならないのは，子どもの生活に立脚して，現実的な舞台の上で話を展開させた児童文学作品は，スウェーデンに限って見ても，現在ではそうめずらしくない，ということである．

例えば，兄弟のいない一人ぼっちの少年が，友人を得て歓喜する様子を描いた Hans Peterson の「マグヌス・シリーズ」，活発な好奇心に満ちた少女ジョゼフィンと強い自己を持つ少年ヒューゴーが，現実をしっかり見つめて生きる様子を描いた Maria Gripe の作品集，家事だけが生きがいの母親と，仕事が終ればグチをつくばかりの父親の中で，物理的には何も不足がないにもかかわらず，家庭に対する嫌悪感をつのらせる少年をとりあげた，Olga Wikström の作品，結婚しない母親と娘を描いた Stina Hammar の作品，腕白者の少年を罰したり，押え込んだりせずに，新しく暖かい人間関係の中で包み込んで行く家族のあり方を描いた，Ingrid Sjöstrand の作品など，秀作が目白押しである．そして，ヴルデの独自な点は，そうした児童文学の実りを，彼女自身の卓越した描画力を介して，更に幼い子どもの世界にまで持ち込んだことなのである．しかも重要なことは，作品の中で展開される世界が，3才のトッテにとって，この上なく真実で，現実的な世界であり，決して年長の子どもや，況んや大人のとらえ方や視点で，すりかえられてはいない，ということなのである．

注

（1）「トッテ・シリーズ」の各作品を発刊年順に表にすると次の様になる。

発刊年	原題名（仮訳）	
1969	Totte badar	（おふろに入る）
	Totte går ut	（外に出かける）
1970	Totte bygger	（家を建てる）

	Totte städar　(かたづける)
1972	Totte går till doktorn　(医者へ行く)
	Totte klär ut sig　(着かざる)
1973	Totte bakar　(ケーキを焼く)
	Totte leker med kisse　(ねこと遊ぶ)
	Totte och Malin　(トッテとマーリン)
	Totte är liten　(トッテは小さい)

(2) Gunilla Brorsson Wolde (1939～　)

(3) ヴルデを紹介する為の資料として利用したものは，私がヴルデと直接交した私信の外に，

Alfons, Harriet: "Gunilla Wolde" in "De skriver för barn", Lund: Bibliotekstjänst 1974.

Presentation i tidskriften Svensk Bokhandel nr. 39, "Gunilla Brorsson-Wolde", 1973.

Brunnberg, Kerstin: "Woldes Totte—böcker—en protest mot alla usla barnböcker" in Förskolan nr. 5, 1976.

(4) Ørvig, Mary: "Children's books in Sweden 1945～1970. A Survey" Austrian Children's Book Club, Vienna 1973.

なお，後出するスウェーデン児童文学の紹介個所は，すべて，このØrvigの論文を拠り所にしたものである。

(5) 保母であるInger Sandbergと，さし絵画家Lasse Sandbergの協力によって生れた多数の作品．非常に明確な教育的観点を持っているのが特徴．例えば，「列に並んで順番を待つこと」，「公害による空気汚染」，「人種偏見」なども「絵本」のテーマに選ばれている．読者としては，やや年長の幼児ないし，児童を対象にする．既に国際的評価も高い．

歪められる「トッテの世界」

さてヴルデの「トッテ・シリーズ」は，その後に出版された姉妹篇の「エンマ・シリーズ」と共に，現在16ケ国語に翻訳され，既に20数ケ国で読まれている．しかし，こうして「トッテ」が世界中に広まっていく過程で，新しい困難が生じて来た．

それは翻訳に伴うオリジナルの変貌という，ごく一般的な問題に関連し

ているのだが，ただこの場合，「トッテ・シリーズ」が幼児向絵本であるという性格の故に，問題が非常にあからさまに出てきたのである．まず第一の問題は，幼児に与える本であるという観点から，翻訳の段階で，しつけに関する各国の姿勢が，色濃くにじみ出てきたことである．そしてもう一つの問題は，本の中で「絵」の占める役割が大きいだけに，各国の翻訳者・編集者がオリジナルの文章の価値を軽く見たということである．では少し具体的に事実を追ってみよう．

まず1969年に，最初の作品『外に出かける』と『おふろに入る』とがスウェーデン国内で，SAGAという出版社から発表され大成功を収める．これに目をつけた英国の大手出版社 Hodder & Stoughton は，共同市場での更なる成功を狙って版権を買い占め，1971年から，このシリーズの多国間にまたがる共同印刷出版を開始する．従ってそれ以後は，この英国出版社を介して各国の出版社が自国語に翻訳し刊行する，というシステムに変り，世界中で急速に発行部数が伸びて行くのである．ところが，このいわば版元の英国出版社とヴルデの間で，既に英語訳をめぐって争いが起っていたのである．『外に出かける』の方は，英国側が，かなり乱暴な英語訳を，ともかく刊行してしまった．しかし『おふろに入る』の方は，翻訳の中でいじるだけでは収まらずに，ヴルデに対して，「絵」を「修正」することさえ要求してきたのである．というのは，この本の中には，まる裸で水遊びしたり，泳ぎ回るトッテの絵が出て来る．スウェーデンでは，5才位までの子どもが夏に裸でいるということは，ごく自然なこととされている．なにしろ国民的大画家カール・ラーションの絵にも，裸のまま湖で水浴している子ども達の状景が描かれているし，第一大人でさえも長い冬の後の短い夏には，まる裸でいたいようなスウェーデンの自然なのである．所が英国人には，これが受入れがたかった．裸で泳ぐなどというのは品が悪い，是非とも英国版に関しては，水着を着けた絵に差しかえてほしい，ということであった．しかしヴルデが強硬に変更を拒んだため，その後し

ばらくして英国でも，オリジナルの絵のままで，この作品は出版されることになったのである．英語訳をめぐる，ヴルデと英国出版社との争いはこれに尽きない．たとえば，スウェーデン国内では1973年に，トッテ・シリーズの最終作となった『トッテとマーリン』が刊行されている．しかし，先に述べた様に，1971年に英国での多国語による共同印刷・出版というシステムが出来上っていたにもかかわらず，英国側はこの本の出版をためらった．実は，この本に関しては，スウェーデン以外の共同印刷加盟国も全部難色を示したのである．つまり，トッテ（男の子）とマーリン（女の子）が裸で遊んでいてお互の体の差異に気づく，という筋の展開の中で，二人が並んでオシッコをする絵がまずい，というのである．現在ではもう，この作品を称讃こそすれ，まじめに文句をつける人がいようとは考えられないが，当時はそういう状況であった．結局，読者からの要望が強かった為に，２年余り後の1975年に翻訳版の第一刷が出る形になったのである．英国側とヴルデの争いが最高潮に達したのは，1972年に出た『着かざる』という作品をめぐってであった．この作品はオリジナルとほぼ同時に翻訳版が出版されたのであるが，英語・英国版（米国版ではない）で大変奇妙な文章の手直しの為されていることが，その後明らかになって，大もめにもめたのである．お話のあら筋を説明すると，トッテが女の子のマーリンと一緒に，大きな箱の中から，色々な衣装をひっぱり出して身につけていく．一枚着物をつける毎に二人は変身して行って，最後に二人はきかざったおばあさんの様になる．所が，英国人には，たとえ３才の子どもとは言え，男も女も二人ともおばあさんになる，ということが引っかかったのである．こうして英国版では，二人は「着かざった市長さんと，市長夫人」に変えられたのである．当然ながら，お話全体のバランスは著しくくずれたわけで，ヴルデとの間に激しいやりとりが行なわれた．その結果，この本の英語版そのものは改められなかったものの，それ以後，英語訳はすべて，ヴルデの検閲と承認を得てから，始めて印刷に回されるべしという一札

が，英国出版社側から入れられたのである[1]．

以上，翻訳の過程で如何にトッテが変貌したか，あるいは困難な整形手術を試みられたか，ということを英語訳に関して，とり上げてみた．勿論他のどの国で出された翻訳についてみても，同様な状況は報告できると思う．しかし英国版・英語訳を敢えて問題にした理由は，トッテの国際化に関して，英国，正確には英国の出版社が要の場所に位置していたということと，スウェーデンとは言語的にも文化的にもかなり近接していると思われる英国で，これだけ大きな内容の変更が試みられたという事実に言及したかったからである．ヴルデ自身，各国語訳を真剣に検討した結果，英語訳が最悪であると断定しているのである．英語訳の問題は邦訳を検討する段階で，改めて取り上げたいが，その前にまず，ここでヴルデの「絵」について考えてみよう．

現在各国で出ている様々な児童絵本の中で，同一の作者が，絵と文章（テキスト）の両方をこなし，それでいて一流の地位を保っているような作品は，ざらにはない．つまり秀れた作家と，秀れたさし絵画家とが合作した方が，成功の確率が高いのである．例えば，アストリッド・リンドグレンの「長くつ下のピッピ」にしても，もし，イングリード・ヴァング・ニーマンの素晴らしいさし絵がなかったならば，これ程短期間に国際的評価を得られたかどうか判らないのである．

しかしヴルデは「絵」だけとって見ても，世界の一流である．簡潔で能弁，そして魅力に溢れた彼女の「絵」が，適格にトッテの状況を語ってしまう．つまりさし絵というよりは，絵の方が主役でテキストは「さし文」とすら呼べるほどなのである．従ってヴルデ自身，もともと「さし文」は，この絵本を子どもに読んでやる側の大人が，ある意味で子どもに追いついていけるように添えたのだ，とさえ語っているほどである．つまり子どもは，既に「絵」を読んでいるはずだ，と彼女は言うのである[2]．この辺の自信に満ちたヴルデの主張は，一葉，一場の絵にすべてを語らせる社会諷刺

画家として，既に名前を上げていた彼女の，面目躍如といった感がある．

所が，ここには落し穴も同時にあいていたのである．それは各国の翻訳者・編集者が，同一作家の描いた絵が，これだけ大きく本の性格を規定しまっている以上，テキストの方は各国の状況に合わせて，かなり変更しても構わないのだろうと受取ったことなのである．ヴルデでさえ，「絵」の機能を信頼しすぎた為に，翻訳の段階で，これほど本の性格に変化がもたらされるとは，思っていなかった様子である．しかし，ちょうど諷刺画が「絵」に添えられた一つの言葉，一つの短文によって魂を吹き込まれるように，「トッテ」の場合も，実はヴルデのオリジナル・テキストが，作者自身が考えている以上に，重要だったのである．

注

(1) 英語訳をめぐる問題に関しても，前掲した資料の他に，ヴルデと交した文通が拠り所になっている．

(2) 「絵」の果す役割については，ヴルデ自身の論文がある．
Wolde, Gunilla: "Bilden i boken", Konsttidskriften Kalejdoskop nr. 1, 1976.

トッテとトミーちゃん

『トッテ』の日本語訳は，児童図書専門の出版社としてよく知られている偕成社から，1976年に，「トミーちゃんシリーズ」[1]という名前で刊行されている．翻訳者は高村きみ子氏であるが，先日，このシリーズを担当された同社編集部の神鳥統夫氏にインタヴューした所，スウェーデン語という少々特殊な言葉の性格上，複数のスタッフのチーム・プレイに依るものである，という解答をいただいたので，以後，邦訳を担当した編集者達という風に，一般的な呼び方をさせていただこうと思う．

さて，「トミーちゃんシリーズ」全体を見渡してみると，翻訳としての出来は大変良いように思う．滑らかで美しい日本語，明瞭な意味の表現な

ど，実に細やかな子どもへの配慮がうかがえる．また私が邦訳の一部を再びスウェーデン語訳して，ヴルデ自身に問合わせた結果，『トッテ』の翻訳としては，かなり良心的なものであるという返答すら受けたのである．もしオリジナルの『トッテ』を読んだことのない人が「トミーちゃん・シリーズ」に目を通したならば，何の不満も感じないばかりか，美しい絵に組合わされた，美しく簡潔な日本語文に，ほほえましい印象を受けるであろうことさえ，間違いないのである．

所が私には，何か，邦訳が美しすぎるような，日本に馴じみすぎるような感じがしてならなかったのである．そこでオリジナル版と邦訳版を一冊一冊つき合わせ，教育学の覗きめがねでにらみをきかせた所，ジワリジワリと，私の抱いていた不満の原因が浮び上ってきたのである．そこでこれから，そうした問題が邦訳のどの個所に現れているか，また邦訳に含まれているオリジナルの改変が，どういう種類のものなのか等を検討して行って，最後には，そうした邦訳が拠り所にしていると思われる出発点，いわば暗黙の大前提にまで掘り下げてみたいと思っているのである．

そこでまず，私の展開しようとしている議論が，決して観念的な思い込みによるものではない，ということを証明する為に，「シリーズ」の中から数冊の『トッテ』を選んで，オリジナルと邦訳の間の，慎重な引きくらべを行いたいと思う．但しこの際，オリジナルと言っても，私自身の日本語訳に頼る以外ないのだが，このこと事体からもたらされる疑念が極小になるように，努力するつもりである．さて，ひきくらべを容易にする為にここで記号使用に関する定義をしておきたい．それは，実線で囲まれた部分の文章は，私自身の翻訳を介した［オリジナル］，破線で囲んだ文章は偕成社版の［邦訳］，波形線で囲んだ文章は，同じく私の翻訳を介した［英国版英語訳］を意味するということである．

1．原題『かたづける』，邦題『くまくんどこ？』に関する比較考察．

このお話は明らかに，子どもに「ものをかたずける」ことを学ばせる目的で書かれている．しかしここに描かれているトッテの行動様式とか，判断や認識の仕方の中には，すべての人間に共通のものも含まれており，その意味でこのお話は，私達大人にとっても大いにドラマティックで，感動的だとさえ思えるのである．さて話のあら筋は次のようなものである．
①トッテは今，ぬいぐるみのクマ（「ナッレ」）と遊びたい．でもナッレはどこかに行ってしまって見当らない．②トッテは，あちこちとナッレを探しはじめる．③色々な場所で，色々なおもちゃをみつける．それはそれで楽しいし，特に長いことどこかへ行っていたおもちゃを，たまたま発見した時は，とてもうれしい．④しかし今は，どうしてもナッレに会いたい．方々探して行って，とうとうナッレ以外のおもちゃを全部一巡し，さっきは，イスの後でみつけた同じボールを，今度はおもちゃ箱の中で，またみつける．⑤ここでトッテは，探すそばからおもちゃを，どんどん放り出すという，今迄のやり方では，部屋中がゴチャゴチャになるだけで，とてもナッレが出てきはしないということに気づく．⑥もしか，ちゃんとかたずければ，ナッレは出てくるかもしれない．こう思ってトッテは，順番に色々なおもちゃを片づけていく．⑦とうとう，さっきはいいかげんに見過していたボウシのかげから，さてボウシも片づけようという段になって，初めてナッレを見つける．⑧トッテは大よろこびする．⑨そして，ナッレを探している内に，いつの間にか，部屋中がきれいに片づいていることに気づく．

論理的とも言えるような見事な筋立てである．邦訳は，この筋の流れというか，「本筋」をかなりよくつかんで追っている．しかし英国版の方は，この本筋をズタズタに分断してしまっているので，オリジナルの特徴は台無しになっている．この点で，英国版と較べるならば邦訳の方は，月とスッポンと言えるほど勝れているのである．しかし邦訳に於ても，オリジナルの文章と同様に，この筋立ての中に働く論理性が太々と貫かれている

か，というと，これは大いに疑問である．その個所は，このお話の中で最もダイナミックな展開のある④—⑤—⑥の流れの場面である．該当部分のオリジナルと，邦訳文を抜き出すと，（なおこれから出てくる引用文中のアンダーラインはすべて，後の議論の為に，私がつけ加えたものである．）

p 13	じゃあ，つみきばこのなかは？　ナッレがいるかな？ いない．へんてこぼうしとボールがあった．	つみきばこのなかはどうかな？
p 14	あれっ，<u>またボール！</u> おかしいなあ　ボールは　さっき　いすのうしろにあったのに！	ぼうしと　ぼーる． 「あれっ，へんだなあ．ぼーるは　さっき　いすの　うしろに　あったのに…．」
p 15	トッテのおもちゃで，もうゴチャゴチャ　です．　<u>こんなところで，どうしてナッレがみつかるでしょうか？</u>	「あーあ，へやじゅう　ごちゃごちゃに　ちらかっちゃった．」
p 16	もしもトッテがかたずけをすれば，ナッレがでてくるかもしれません．	「でも，くまくんはどこへいったのかなあ？」
p 17	トッテはひろってあつめます． ボールとじどうしゃとつみきと，ぞうさん．	<u>ちらかった　おもちゃ</u>をかたづければ，くまくんは　みつかるかもしれないね．
p 18	それから，おどりなかまのおにんぎょうと，ほんとすけっちぶっくとえんぴつと，えのぐとふでも．	トミーは，<u>ちらかったおもちゃ</u>をあつめました．

以上の文章を比較してみて気がつくことは，邦文の方がオリジナルにくらべて，明らかに文章の量が少ないことである．肯定的な言い方をすれば文章が簡潔になっているのであるが，それにしても情報量が減っているという事実は否めないのである．特にこの場合は，p14の「またボール！」とp15の「こんなところで，どうしてナッレが見つかるでしょうか？」という，いわば，やみくもにナッレを探し続けてきたトッテが，行きづまるくだりでの描写削減なので，次の場面（p16）以降の局面展開のダイナミズムが著しく弱められるという影響が出ているのである．

また実際にトッテがかたづけを始めた段階でも，トッテは，おもちゃを一つ一つ，「ボールときしゃとつみきと……」という風に確認しながら整理していく．こうした物の認識の仕方は，何も「ピアジェの言う具体的操作期[2]以前の」などと説明しなくても，3才前後の幼児には，ごく普通のことである．しかし，もし邦訳にあるように，「ちらかったおもちゃ」というような，集合論的に整理された概念を突きつけられたならば，具体的な事物との直接的なかかわりの中で自分の認識世界を築き，いわば直観的思考に依って生きている幼児は，途方にくれるだけなのである．

さて教育的観点から見た場合，このお話の中核は何なのだろうか，それはまず，「計画的にものを探すこと」と，「ものをかたずけて整理しておくこと」との間の認識上の関係を発見することである．つまり，物をキチンとかたずけておくことが，必要な時に物を探す上で，如何に合理的なやり方なのか，ということを子ども自身が（トッテと一緒になって）試行錯誤していく内に，ハッと気づくことである．これがp16までの動きである．次は，こうして自分で探りあてた認識の構え，しかしまだ不確実で自信の持てないこの考え方を，子ども達が(トッテと一緒になって)，「かたずけ」という実践の中に生かしていって，ついに目的のおもちゃを発見し，心からの満足感，充実感を得ることである．この喜びは，単に目的のおもちゃを探りあてた，ということにだけ結びついているのでなくて，自分の認識

上の飛躍が適切だったのだ，報われたのだ，という自分自身への満足感を含んだ二重のものでなくてはおかしいのである．しかし残念ながら邦訳では，既に述べたように，「本筋」のつかみ方が今一つ甘いという理由と，幼児の認識世界を無視したような簡略な表現を用いている，という理由とによって，先に上げた，教育的中核が持つ，幼児への影響力が弱められているのである．

さて「幼児の認識世界を無視」ということに関連させて触れておきたいことがある．それはあら筋で説明すると③の段階，つまり「色々な場所で色々なおもちゃをみつける…」という場面に顕著に現れた邦訳の特徴である．まず文章を較べてみよう．

p 5	ベッドのしたに，ナッレはいるのかな？	べっどのしたかな？
p 6	いない．でも，つみきと，ずっとまえになくしたきしゃがでてきた． よかったあ！	くまくんは　いなくて，ずっと　まえになくした，きしゃがでてきただけ
p 7	じゃあ，ナッレは，いすのうしろに，ねころんでいるのかな？ いない，ここにいるのはナッレじゃない．	いすの　うしろかな？
p 8	じどうしゃと，おおきなボールだ．	とらっくと　ぼーるが　あっただけ．

邦訳文で単に情報量が減っているということはもう言うまい．ここで問題にしたいのは，子どもの「探す」という行為自体に邦訳者達が貼付けた，

否定的なニュアンスを伴うレッテルのことである．確かにトッテは，今どうしてもナッレを探したい．しかしだからと言って「探している」過程で他の物が見つかったことを，何だバカバカしいという風には受取っていないのである．p6の様に，ついでに別の探しものが見つかったりして，結構，「探すこと」自体が楽しいのである．従って読者である（正確にはお話を読んで聞かせてもらっている）子ども達が，トッテと一緒になって，探すこと自体に夢中になっていて当然なのである．あるいはむしろ，この後の段階で訪れることになっている一種の認識上の飛躍という，教育的インパクトを確実なものにする為に，探すこと自体に熱中していてほしいのである．所が邦訳では，文章の中に，「でてきただけ」，「あっただけ」という風な否定的ニュアンスが挿入されている為に，「探す」という行為が，具体的な特定の目的物（この場合は，ぬいぐるみのクマ）との関りでしか意味を認められていないのである．いわば目的物に到達するずっと以前の段階，つまり③の過程では，読者である子ども達に楽しむ余地を許していないのである．ところがこの問題に関してはあのヒドイ英国版がおもしろい材料を提供しているのである．先に引用した，オリジナルと邦訳文に該当する部分を，少し拾ってみると，

p 5

> 「くまくん，そこにいるの？」こうよびながらトーマスは，ゆかにひざをついて，ベッドの下をのぞきます．でもトーマスが見つけたのは，ワタボコリが少々と，古いつみきと，長い木のきしゃだけでした．

p 6

> トーマスはそこで，ベッドのことを，長い暗いトンネルにみたててみました．すると，とてもおもしろくなって，いまはくまくんのことをさがしているのだ，ということさえ忘れそうになりました．

引用はもう充分であろう．要するに英国版では，オリジナルの文章には

含まれていないような情報が，どんどん加えられているのである．そして実は，このことが「トーマス・シリーズ」全般の最も顕著な特徴であり，又，同時に，『トッテ』の翻訳としては世界最低とまで言われている理由なのでもある．しかし引用した文章に即して言えば，英国側の翻訳に際しての態度はよく理解できる．つまり，この「かたづける」という話の本筋は幼児には難しすぎる．あるいは，その教育的意味を認めがたい．従って，子どもの為には，例えば「探す」過程もそれ自体として楽しくなるようにもっとふくらみを持たせて，ニュアンスを込めてやらなければいけない．——およそ，こうした，日本側とは正反対の見解が，英国側には存在したと想像されるのである．

2. 原題「外に出かける」，邦題「おしたく　できたよ」に関する比較考察．

このお話はヴルデの，ごく初期(1969年)の作品である．従ってヴルデは，まさか『トッテ』が翻訳されて世界中に広がっていこうなどとは，夢にも考えずに，この作品を執筆したのである．それだけに，この作品の背後には，スウェーデンのローカル色，特殊性を感じさせる所がある．その上ヴルデは，彼女の基本方針，つまり絵に充分語らせて，文章は極力少なくする，というやり方をこの作品の中では，特に強く押し出しているのである．

こういう二つの特徴から，この小さなお話のおもしろさ，おかしさを理解する為には，自分自身が小さい子どもとしてか，あるいはそうした子どもを持つ親として，スウェーデンの冬を実際に過す必要があるのかもしれないのである．

さて現代スウェーデンの住宅設備は，世界最高の水準にある．特に冬の室内暖房は，気候がら重点的な配慮を受けている．大ていの場合，セントラル・ヒーティングと，二重三重の断熱窓を組合わせて，室温は20～24°C位に保たれている．所が冬の戸外気温は，スウェーデン全域について考え

てみても，（つまり南部のことを考慮に入れても）日中で，マイナス10°C以下になることがめずらしくない．従って，子どもが下着一枚で，あるいは裸ででも飛び回っていられる室内から，外へ遊びに出かける段になると親は子どもに充分な防寒の仕度をさせる為に，自分が汗だくになる始末である．それでも，この時期に子どもを外で遊ばせるということは，身心の健全な発達を願う以上，スウェーデンでは欠かすわけにいかないのである．

こうした背景で，このお話は書かれている．筋といえば．「トッテが外へ出て行く前に，必要な防寒着を，試行錯誤を重ねながらも，とうとう全部，自分で身につけた」というだけのことである．

勿論実際には，3才位のこどもが，完全に一人で，こんな重装備の身仕度をする，ということは不可能である．しかしこのお話を読むことによって，子ども達が，このめんどうくさい着換えに対して幾分でも好意的になってくれたり，あるいはまた，着換えの過程で何を先に着て，何を後に着たら都合が良いのか，ということに対する認識のようなものを持ってくれるだけでも，着換えを手伝う側の親からみれば，大進歩であり，大変に助かることなのである．

つまり，冬のスウェーデンに密着した，「着換え」あるいは「着込み」の習慣をしつける，ということがこのお話のねらいなのである．ただこの作品の勝れている点は，こんな全く習慣で済むこと，と片づけられてしまいそうなしつけを身につけさせる場合でも，子どもの自発性と自主性が，しっかり中心に据えられていることなのである．では果して，こうした原作の意図が邦訳に生かされているかどうか，を注意しながら引き較べを行ってみよう．冒頭の部分は次の様に始る．

p 1

ゆきのなかへ　あそびにでかけるときは，まず，ぼうかんぎを　きなければいけません．	さむい　ゆきの　あさです．「そとへいって　あそびたいな．」

この二つの文章の違いは大変に重要である．つまりオリジナルの方は，しつけ項目というか，規則あるいは規範が提示されているのに対して，邦訳文では，それが外されているからである．次のページでは，もうすぐに，「トッテはまずぼうしをかぶりました.」と始ってしまうだけに，この最初の文章にみられる相異は，トッテの行動の出発点に於る相異とみることができよう．念の為，英語版を見てみよう．

p 1

> 朝起きるとすぐに，トーマスは外へ遊びに行きたくなりました．お母さんが言います．「トーマス，外は，とても寒いのよ．まず服を着て暖かくしなければいけませんよ.」

p 2

> トーマスはあたたかい服を沢山持っています．さて，何を着ようかな．

何とも見事な程に情報を追加したものである．特に p2には，オリジナルにも邦訳版にも「絵」がのせてあるだけなのに，そこにもこれだけ文章をつめ込んでいるのである．しかし問題は英訳文の場合にも，p1 のお母さんの言葉の中にキチンと規範が示されている点である．私は何も規範の内容を言っているわけではない．規範内容自体は日本では現実味の薄いものだから，うっかり見落されても文句は言えない．ただ重要なのは，「～しなければいけない」という規範の形式をとって，あるいは価値命題として文章が示されている点である．実践的三段論法という言い方にも示される様に，およそ人間が主体的に自分自身の行動を規定しようとする場合には，「～すべし」という風な指令的性格を持った命題が，まず意識の中に前提として措定されなければ，自分自身の最終的行動も引きだしようがないのである．従ってしつけの場に於ても，子どもにまず規範を規範として示してやるということが同じ人間としてのかかわり合いの最一歩だと思われるのである．この点に関しては，オリジナルと英国版とは，文章量の違

いにもかかわらず，同一見解をとっているものと思われる．勿論規範内容についての吟味ということも，別の問題として行なわなければならないのであるが，スウェーデンの気候の中で生きてさえいれば，この規範の妥当性は，だれの目にも明らかなのである．今までの説明をトッテの心理に即して言えば次のようになるだろう．「これから長い時間をかけて，めんどうくさい思いをしながら色々着込んでいくんだもの．どうしても，やらなきゃならないことでなければ，とてもこんなことやっていられないよ．」

さて，お話のスタートがこういう形で相異する以上，当然予想されることだが，トッテが身仕度を整え終った最後の場面では，オリジナルと邦訳の間に，次の様なひらきが出てくる．

p 23

さあ　したくができた．ひとりで　ぼうかんぎをきるのはそんなにたいへんでもないなあ．	さあ，したくが　できました．「ゆきの　なかで，なにをしてあそぼうかな．」

この場面の「絵」の方を見ると，つりズボンのつりは片方はずれているし，ジャンバーのファスナーも，まるで開きっぱなしになっている．これでは本当に外へ出かける前に，どうしても親が手を貸さないわけにはいかない状態である．しかし幼児にしてみれば，途中で投げたりもせずに，何度もやり直しながらも，ここまでたどり着いたということは，大成功なのである．主体的に「着込み」に取組んだが故の，大満足，大自信である．「絵」との関係では，ちょっとアイロニーじみるが，こんな大ぜりふなど吐いて，鼻をピクつかせてみたいのも，至極人間的だと思われるのである．しかし邦訳では，こうしたトッテの感動が，完全にそらされてしまっている．これでは，今までトッテと一緒になって真剣に「着込み」に取組んできた，読者である子ども達の緊張を，どういう形で解消したら良いのだろう．

さてトッテが途中色々と着る順序を間違えたり，ふざけたりしながらも段々に身仕度を整えていく経過はどうであろうか．まず一番始めにぼうしをかぶり，次にセーターを着ようとしたら，どうもうまく行かない．ここでトッテはハッと気がつく．ああそうだ，ぼうしが大きいのでじゃまになるのだ．だからまずセーターを着て，それからぼうしをかぶれば良いのだ．これも一種の認識上の飛躍と言って良いかもしれない．つまり，服を着るには，一定のより良い順序があるらしいということに気づいただけでなく，思い切ってやり直すことの効用をも，トッテが理解しはじめたのである．

そして次には，つりズボンとジャンバーとの関係で，同じタイプの困難に直面する．ここでトッテは…，

p 11

やりなおすのが，いちばん．ズボンとジャンバーをぬいでしまえば，はやみちさ．	「ずぼんも　じゃんばーも　ぬいで，やりなおし．」

オリジナルの方からは，以前の経験を判断様式にくみ入れて，合理的に行動するトッテの姿がうかがえる．しかし邦訳からは，あまり意識もせずにステレオタイプ化された行動パターンをくり返す子どもの姿が浮んでくる．

身仕度がもうそろそろ完了という段階で，トッテは既に身につけたものを確認する．

p 18

いままでに　きたものは，セーターと，ぼうしと，タイツと，ソックスと，てぶくろと，ズボン．	ぼうしに　せーたーに　ずぼんに　たいつに　てぶくろに　くつした．

こんな部分を引用して何事だろうと思うかもしれない．しかしオリジナ

ルの文章に書かれた衣類の順序は，これならば引っかからずに着れる順序，つまり試行錯誤の末にトッテが発見した一つの正解である．所が何と，邦訳に書かれた順序は，大人の目から見て，あるいは部外者から見ておさまりがいいかもしれないが，トッテが発見した悪い順序，つまり，セーターがぼうしに，たいつはズボンに引っかかってしまって，とても着れない順序なのである．この絵本を「絵」と「ことば」を付き合わせながら，何度も読むであろう子ども達に対して，邦訳は何とも無責任な仕打ちをするものである．

3.　原題「ケーキをやく」，邦題「けーきをつくる」に関する比較考察．

このお話は，トッテが一人でケーキを焼く様子を描写したものである．所で，実はこんな小さい子が色々と仕度をして，ケーキを焼くという設定自体が日本では特殊である．

しかしスウェーデンでは，少しめんどう見のよい親ならば，この程度の活動は，割とひんぱんに子どもに許しているのである．勿論，レンジやオーヴンがすべて電気で賄われていて，子どもがいじってもそう危険はないとか，子どもが少々不器用に動き回っても，それほど，さしさわりのない程度の台所空間が確保されている，といったスウェーデンでは極くあたりまえの「物理的条件の良さ」がきいていることも見落せない．

また，この話の大半のページには登場していないが（つまり，トッテの目には入っていないが，）傍らで（多分，少し離れて）見ていて，要所要所で，トッテの手助けをしている「父親」のあり方も印象に残るものである．こうした表面立たない形のめんどうの見方は，実はかなりゆとりを持った姿勢がないと，実行できない種類のものである．しかし現在では，若いスウェーデン人の父親の多くが，このトッテの父親と同様に振まうであろうことは疑いがないのである．

欧米では，パンやケーキが自分で焼けるということが，家庭経済上大き

なメリットになる．所がこの幼児向絵本の中に記されたケーキ焼きの手順は，既にかなり刻明である．また材料名がしっかり把握できるように，何度もくり返して列挙したり，各調理器具の用途や扱い方なども具体的に詳しく述べたりしていて，正にこの絵本は，「家庭に於る家庭科教育の手引き」といった趣きがある．

しかし邦訳の方は，あくまでも子どもの遊び，としてとらえているせいか，料理のコツ所などについての関心が全く払われておらず，従ってその分，現実味の乏しさを感じさせるものになっている．それでは，トッテと一緒にケーキを焼くことにしよう．

p 1

ケーキをやくときには，たくさんのものが　いります．まずトッテは，たまごをひとつと，さとうと，こむぎこと，バターのかたまりを，だしてきます．	トミーが，けーきをつくります．まず，たまごと，おさとう，こむぎこと　ばたーをよういします．

既に一仕事するぞ，という意気込みの点で，オリジナルと邦訳では差がついてしまった様である．次に調理器具が用意される．

p 2

それからトッテは，あわをたてるのにつかうボールと，あわたてき，けいりょうにつかう　カップ，かきまぜるのにつかう　スプーン，ケーキをやくかた，それにふみだいを持ってきます．	それから，ぼーるにかっぷにあわたてき，すぷーんと　けーきの　やきざらと，それから　ふみだいも　わすれずに．

邦訳では，個々の道具が何に使われるのか，という用途の説明部分が脱落している為に，読者である子ども達が，これから先の仕事を見通す手がかりがなくなっている．

さてここで父親がオーヴンのスイッチを入れてくれる．つまりあらかじめオーヴンを暖めておく為である．次の手順として，

p 4

トッテはエプロンをかけます．こうすれば，なにかをこぼしても，へいきです．	トミーは，えぷろんをして，じゅんびおーけー．

邦訳では，エプロンは一体何の為のものなのか，を確認させる機会が，みすみす失われている．それから，

p 5

ケーキをつくるにはまず，たまごがいります．そこでトッテは，たまごのなかみを，ボールのなかにあけるために，たまごを　ボールのへりにぶっつけてわります．	まず　たまごを　かつんとわって……

わずか3才の子どもが，邦訳文が示すように，現実に，これ程手馴れているのだろうか？

ちゃわん等のへりに，強すぎず，弱すぎずうまい具合にぶっつけて卵を割るということは，誰にとっても，始めは，なかなか緊張を要する仕事である．だからこそオリジナルの方は，

p 6

おっととと．あっというまに，でちゃった！　ちょうどボールのなかにおっこちて　よかったなあ．	ぼーるの　なかに　つるん．

邦訳の方からは，どう取っても，トッテの胸にドキッときた感覚は捕えようがない．次の段階は，

p 7

それからトッテは，さとうをふくろのなかから１カップとり，たまごのうえに　かけます．	そこへ　かっぷ　一ぱいのおさとうをいれ……

「そこへ」という省略された言い方が，幼児　にとって，どれ程理解しにくいものか，教育にたずさわったことのある人なら，誰でも知っている．さて次に，

たまごとさとうは，よくあわだつまで，かきまぜなければいけません．トッテは　うでがいたくなるまで　かきまわします．	あわたてきで　かきまわします．うでがいたくなるまでぐるぐるぐるぐる．

邦訳文の表現は，とてもこなれた美しい言い回しだと思う．特に原文にある vispa（英語の“whisk”，米国語の“whip”にあたる．）という動詞を「あわだてきで　かきまわす」とした所は，「空気を混入させる様な形で，よくかきまぜる」という調理動作が，「茶道」を除けば，伝統的な日本料理の中では，それ程ひんぱんには使われないだけに，よく考えた訳だと思う．しかし問題は，オリジナルの文章が，「かきまぜなければいけません」あるいは「～することになっています」という言い方で，トッテの頭の中にある料理手順つまり「料理規則」を述べている点である．「かきまぜなければいけない．」だからトッテは，この規則を念頭に置いて，次に「うでがいたくなるまで，かきまわす」のである．しかし邦訳では，本来料理手順あるいは予定を示すはずの文章が，現実のトッテの行為に変ってしまっている．従って邦訳を読んだ印象では，なぜそうするのかも考えずに，トッテはさっさとかきまぜ始め，しかも，うでがいたくなるまで，かきまぜ続けるのである．これが子どもとは言え，生きた人間の行動様式だ

ろうか，それとも邦訳者は「子どもは理屈をこねるな，黙って考えずにやれ.」ということを読者である子ども達に，しつけたいのだろうか．次に，

p 9

それから，こむぎこをカップに1ぱいとって，たまごとさとうのうえにくわえます，トッテはスプーンをつかってかきまぜますが，それでもかたくて，かきまぜるのは　たいへんです．そこで　とけたバターがいりようなのです．	そのうえに　かっぷ一ぱいのこむぎこをいれて，すぷーんで　かきまぜます．「そうだ，ばたーもいれるんだ.」

さて，原文にあるように，小麦粉も加わったケーキのもとは，固くねばりついていて，とても上手にかき回したりできない．それでトッテは，「ここでバターを入れればかきまぜやすくなるんだ.」という風に理由を付けて覚えているのである．勿論バターを入れる本当の理由が，ケーキの仕上りをしっとりさせる為のものであることは，言うまでもない．しかし問題は，トッテがきちんと自分なりの理由を持っているという事実である．邦訳では，なぜかそうした経過が省略されている．

以下こういう奮囲気で料理は続けられていくが，オリジナルと邦訳の間のくい違いは，ほぼ既に出たタイプのくり返しである．

また英国版は例によって，状況描写がより親切になるが，オリジナルとの間にそれほど目立った差異は認められない．

注

(1)　「トミーちゃんシリーズ」と　英国版「トーマス・シリーズ」を対応づけて表にすると，次のようにする．なお，掲示順は，オリジナルの発刊順に合わせることにする．

英国版題名	邦訳題名
Thomas has a bath	おふろに　はいる
Thomas goes out	おしたく　できたよ
Thomas builds a house	おうちを　つくろう
Thomas tidies his room	くもくん　どこ？
Thomas goes to the doctor	おいしゃさんへ
Thomas and Sarah dress up	ぼくたち　おばあちゃん
Thomas bakes a cake	けーきを　つくる
Thomas and his cat	ねこちゃん　あそぼうよ
Thomas is different	マリーちゃんとぼく
Thomas is little	ぼく　ちいさくないよ

（2）　ピアジェの考え方を最も適確に表わした，てごろなものとして，
ジャン・ピアジェ著，滝沢武久訳，「思考の心理学」　みすず書房　1968

私達のしつけ観と西洋人形「トミーちゃん」

さて『トッテ』に示された児童観，しつけ観が，現代スウェーデンに於て一般的である，という説明は，『トッテ』があれだけスウェーデンで広く読まれ，受け入れられている事実がある以上，もう必要ないであろう．しかし特定の出版社と特定の翻訳者達が，邦訳の際に行った『トッテ』への「適応化」[(1)]作業，あるいは「手直し」が，果して現代日本に於る「しつけ観」を反映していると言えるだろうか．

私は，児童図書の持つ特殊な性格の故に，そう言って構わないと思う．というのは，既にR．バンベルガー[(2)]が『ロビンソン・クルーソー』のドイツ語訳に関して述べていることであるが，児童図書は決して児童だけに向けられたものではなくて，むしろ，子どもを持つ親，あるいは社会の様々な部署で，教育，養護，訓練などの任に当る人を目指して書かれているからである．

そういう「親」あるいは「親の立場」をとる人は，子どもに良い本を与えたいという観点から，当然，「目」を光らせている．そして，外国から

児童図書を輸入する場合，こうした「目」に異和感を与えないように，原作に対して翻訳者が行う「適応化」作業が，つまり児童図書の翻訳なのである．従って原作と翻訳の間のくい違い，あるいは落差というのは，原作に含まれていた非調和部分，つまり「親」には理解できないであろうとか，「親」には不都合であろうとか，「親」には好ましく写らないであろうとかいうことで，出版社の方でわざわざ変更を加えた部分を意味するといってよいであろう．

こういう観点をとれば，前章で明らかにした，『トッテ』と『トミーちゃん』の間の違いというのは，私達が「見積られた親」として，私達の「見積られたしつけ観」の故に，翻訳者の手を貸りて敢えてもたらしたもの，と言うことさえできるのである．こうなると，もう私達は責任回避できない．私達にとって，『トッテ』のどこが気に入らないのかを，私達の責任に於て，明瞭にしておかなければならないのである．

オリジナルの「トッテ・シリーズ」は，ヴルデ自身も述べている様に，ただ子どもを楽しませるだけの，架空の物語ではない．つまり想像力の翼があたりかまわず飛び回り，子どもを白昼夢の世界へ引き込むというような，魔力を持った童話ではないのである．むしろ，子ども自身が確実に認識できるような，幅の狭い現実世界に足を据えて，その中で，子どもが本来持っている興味や動機を活用し，子どもの主体性を同じ人間として尊重しながらも，この時期の子どもとして学ぶべきことはしっかり身に付けさせようという，実にはっきりした狙いを持った絵本なのである．端的に，幼児のしつけに関する秀れた家庭教育絵本と言っても差しつかえない．

つまり，『かたづける』は文字通り整理整頓の習慣へ子どもの目を開くことを目指しているし，『ケーキをやく』は，家庭生活の中で，子どもに何か一つの仕事を，最後までキッチリ仕遂げることの意味を体得させようとしている．また『外に出かける』も，自分で身づくろいする習慣を子どもの身につけさせようとするものである．本論文の中では，紙数の関係で

触れることができなかったが，「トッテ・シリーズ」に含まれている他の作品に関しても，すべてそれぞれの話の，しつけとしてのねらい所を明示することが可能なのである．例えば『トッテとマーリン』は子どもの理解できる範囲で，「家庭・男・女・子ども」の関係を把握させることを狙っているし，『医者に行く』は子どもを必要以上に注射ぎらい，医者ぎらいにしない為に書かれたものである．『ネコと遊ぶ』でさえ，子どもが，猫の習性を無視してかかることを戒めて，「ネコの飼い方・第一歩」を教えようとしているのである．

しかし既に，「トッテとトミーちゃん」の比較で明らかになった様に，『トミーちゃん』には，残念ながら『トッテ』の持っていたような家庭教育絵本としての効力が，全く見当らない．つまり私達の現代日本人としての「しつけ観」が『トッテ』に表現されている様な家庭教育のあり方を嫌って，『トッテ』から教育絵本としてのインパクトを意図的にか，無意識的にか，奪ってしまったらしいのである．

いや，トッテのお話は，日本の幼児にとっては理解のできない様な，遠い国の出来事なので，やむを得ず，『トッテ』から不必要な現実的特性を抜き去って，日本の子どもが馴じめるようにしたのだ，と弁明する人がいるかもしれない．確かに，あまりにスウェーデンのローカル色が強すぎるような部分に関しては，そういうことも言えると思う．しかし私の見る限りでは，『トッテ』の中には，万国の子どもにとって共通な意味を持つ部分が，かなりの割合で含まれていると思われるのである．つまり，およそ人間の子どもならば，トッテの中に自分の分身を見出し，難なくトッテの世界へ滑り込み，トッテと共に感動し，考え，行動することが可能なはずだと思うのである．そして，いわばトッテと共に生活する内に，この年令の子どもなら誰にでもふさわしい様な形の，家庭教育あるいはしつけがほどこされていいのではないかとさえ，思うのである．

この時期，つまり３～５才位の子どもには，まだ，それ以上の年令の子

どもや，大人に見られるのと全く同じ種類の，「対等な人間関係」というものを望むことはできない．勿論，他人の存在が，子どもの認識の中に入っていない，というわけではない．しかし何と言っても，自分自身の考えや行いに，大半のエネルギーが取られてしまって，他人のことは，せいぜい，時々気になる程度なのである．それ故にこそ，子どもが，自分の思いのままになる，絵本の中のトッテに，自分を没入できるように配慮してやる，ということは，この時期に最も自然で，最も効果的な教育的かかわりを準備する，ということにもなるのではないか，と思うのである．

さて，『トッテ』をこれ程秀れた教育絵本として成立させている理由を考えてみると，主として次の二つの特徴が，原作の『トッテ』に具っていた，という事実があげられる．

一つは，ブッキラボウで直接的な物言いをする「オリジナル・テキスト」と「絵」との相乗効果で造られた「トッテの世界」が，子どもにとってこの上なく真実だという点である．この点に関しては既に，「トッテとトミーちゃん」の章で，ヴルデが如何にきめ細かく，子どもの認識世界を追っているかを説明したので，改めてはとり上げる必要はないであろう．

そして更に重要な二つ目の特徴というのは，『トッテ』の全作品を通じて，トッテが，自分を伸そう，あるいは高めようとして，自分の持てる力を精一杯にふりしぼるような場面や経過が存分に提示されている，ということなのである．「村井実」流の言い方をすれば，要するに「善さへ向う」[(2)]姿勢をトッテが如実に示す場面が，実に効果的にお話の中に収められているということになる．こういうあり方を，子ども達が，トッテを介して体験するということは，とりも直さず，しつけという家庭教育の領域の中で，子ども達が強い教育的インパクトを受ける，ということを意味する．なぜならば，トッテが明示した「自分を高めよう，伸そうとする姿勢・あり方」に共振するかのように，子ども一人一人の中に，本来的に内在するはずの，同じく「自己を高めよう」とする機制が強く活動を始めると考えられ

るからである.[4]

本来子ども達に，「伸びようとする姿勢」があるのなら，それはそのまま，ほっておけばいいではないか，という人もいるかもしれない．しかしこれは，とても乱暴な主張である．なぜかというと，大人の勝手なおもわくの為に，子どもにとって本当に真実な生活がこれ程切りつめられてしまっている現代では，そうした「姿勢」に刺激を与えるような機会を，ただ偶然に期待して待っているだけでは，不充分になってしまっているからである．だからこそ，そうした「機会」をふんだんに盛り込み，子ども達の「善さへ向う」姿勢を手引きするだけの活力を持った『トッテ』の今日的意味が見落されてはならないのである．

さて邦訳された『トッテ』つまり『トミーちゃん』が，教育絵本としてのインパクトを失っていると言うことは，言いかえれば，以上とりあげてきた，二つの『トッテ』の特徴が，無視されているということである．つまり，「子どもにとって真実の世界」を描くことをあきらめ，ふんだんに盛り込まれるはずの「教育的機会」をないがしろにしたと言っても良い．正にヴルデが，『トッテ』の創作にあたって心がけた，子どもを「楽しませる」と同時に「育てる」という二つの目的が，両方共，日本では軽視されたのである．

所が今まで邦訳を厳密に考察する為の，いわばタタキ台に使ってきた英国版の方は，こういう点では，邦訳ほど絶望的でないのである．勿論，英国版が，ヴルデの主張するような「育てる」の部分，つまり「善さへ向って」子どもを手引きするような部分を，確実にとらえているとは思えない．しかしこの「育てる」の部分が成立する為の前提条件でもある「楽しませる」の部分に関しては，英国的な意味で，「子どもの真実の世界」を描こうとする努力が，うかがえるのである．もともと，エトス（習俗）はそれぞれの社会に固有なものである．従って，英国の様に古い性習俗をどこかに保持し，同性愛的傾向に対しても過敏な所があれば，ひとえに，英

国人の子どもにとって真実な世界を描こうとして，ヴルデと大げんかまでして改作を迫るという態度も，理解できなくはないのである．

こう考えてくると，翻訳としては，そのたしなみある態度の故に，英国版をはるかに凌ぐと思われた邦訳版の中に，逆に教育学的に見れば，より大きな変更，手直しがあったことを認めないわけにはいかなくなる．この事実を直視する時，私は正に愕然とせざるを得ない．なぜならば，ちょうどトッテの邦訳によって切り落された部分に，今の日本の教育が最も必要としているもの――「野菜そだてのモメント」への活力剤が含まれていたからである．しかし本当に日本の親は，邦訳者遠が暗に予想しているように，家庭教育のあり方が，現在の学校教育の行き方と，軌を一にしていて良いと考えているのであろうか？　あるいはまた，家庭教育の中でこそ「野菜そだてのモメント」を培ってみようとは思っていないのだろうか？

注

（1）　児童文学の翻訳をめぐる問題は，次の論文がよく整理している．
Klingberg, Göte: "The different aspects of research into the translation of children's books and its practical application" in "Children's Books in Translation" pp. 84–89.

（2）　Bamberger, Richard: "The influence of translation on the development of national children's literature" in "Children's Books in Translation" pp. 19–27.　ここでバンベルガーが論じているのは，なぜ J. H. カンペの独語翻訳版 "Robinson der Jüngre" 1779 が，デフォーのオリジナル版 "Robinson Crusoe" 1719 を遙かに上向る国際的成功を収めたか，についてである．その理由は何と，カンペがオリジナルをいじれるだけ手直しして，そこに自分の思想，つまり当時全盛の啓蒙主義的合理思想を，それも親達の気に入るような御説教風スタイルで，大幅に盛り込んだせいだというのである．

（3）　村井実「新・教育学のすすめ」小学館　1978

（4）　心理学的には，モデリングとかアイデンティフィケーション（同一化）とか言い言いかえることも可能である．しかし私は，そうした言いかえが，教育学的に有益な情報を増やすよりは，むしろ有害な理論的色付けをするのではないか，と恐れるので，こうしたレトリカルな表現を採用するのである．